

見えてくる光景 コレクションの現在地

アーティゾン美術館（東京・京橋） 2020.01.18～03.31

「アーティゾン美術館」は、1952に創設された「ブリヂストン美術館」を前身とし、2015年5月から建て替えのため長期休館していたが、館名を変更して約2倍の展示面積と最新の設備を伴い幅広い美術の楽しみを提供するという。

当美術館は、「人間とは何か」を、造形を通して分かりやすく伝える装置で数万年にわたる造形活動の連鎖が現在や未来の私たちを作っている。

本展では、新収蔵作品「約30点」を含む選り優れの「約200点」を紹介し、古代から現代までの人間の輝かしい造形の軌跡をたどるものである。

鑑賞には、当館のウェブサイトによる「日時指定の予約制」の必要がある。

<新しく収蔵された作品の主なもの>

ヴァシリー・カンディンスキー《自らが輝く》 1924年 油彩/カンヴァス



画伯は、20世紀前半の抽象絵画の創出と発展に大きな役割を果たした「抽象絵画の祖」とされる画家である。画伯は絵画を精神活動として見なし、色彩や線の自律的な運動によるコンポジションに取り組み、大小の円形、四角形、三角形、線上的な要素など、様々な形態が重なりながら絵画を構成している。画面の地をつかさどる赤をはじめ、暖色と対照的な白が貴重をなしている点も特色である。

ベルト・モリゾ

《バルコニーの女と子ども》 1872年 油彩/カンヴァス



印象派グループの数少ないフランス女性画家のひとりで、女性的な感受性で描かれる母子や子どもなどを主題とした作品は、繊細さと穏健さを生み出している。

作品はパリの自邸が舞台で、黒の外着を着飾った女性と白い服の子どもが、バルコニーから眼下に広がる、トロカデロ庭園、セヌ川左岸、シャン・ド・マルス公園を眺めている風景である。この光景の作品は、活気がある筆使いながら、細部までが実にきめ細やかに描かれている。



メアリー・カサット《日光浴》



《洛中洛外図屏風》 江戸時代